

〔随想〕

「一九九六年秋、カンボジアの素顔」

中 谷 陽 子

未だ雨期は終わっていないが、雲の層は薄くなり始めていた。私は飛行機の窓から目を凝らして、はじめてのカンボジアがどんな姿を現わすのか、先刻からじっと待っている。中継地バンコクから一時間余りと近いので、間もなく機体は高度を下げ始めた。ササーッと霧状に雲が流れたと思ったとたん、目下に一面水びたしの光景が広がり、私は思わず息をのんだ。「メコン河があふれ、洪水になる」と旅の直前に知らされていたが、これ程とは想像もしていなかった。

中国の山間部に源を発するメコンの流れ、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムを経て、その四千キロに余る大河は豊かさを誇りながら南シナ海に至る。特にカンボジア国内を流れるメコン河の水系は、実に興味深い構造になっている。カンボジアの穀倉地帯は巨大なトンレサップ湖の周辺に広がり、湖から流れ出る水もトンレサップ川を経てメコン河に流れ込んでいる。ところが毎年雨期になるとメコン河はふくれあがり、あふれた水は何とトンレサップを逆

流してくるのである。その結果湖とその周辺は満々と水をたたえ、肥よくな土が大量に運ばれてくることになるが、その水量は年々に異って一様ではない。このあたりの稲は頭（穂先）が水面に出るまで茎を伸ばすというから、自然の賢さには驚くばかりである。この種の稲には五メートルも背伸びのできるものがあるというではないか。

ところが今年は事情が異って、30年振りの大洪水になってしまった。メコン河の上流、中国南東部とラオスでは9月中旬から豪雨が降り、一気にふくれあがったメコン河はさらに雨期の各地の雨を集めて流れ下り、9月下旬にはタイに続いてカンボジア東部が浸水し始めた。旅を目の前にした私のもとへ「プノンペン（カンボジアの首都）の被災は、もはや時間の問題」という信じられないようなファクシミリ通信が舞い込み、私をあわてさせた。都市中心部や幹線道路などは水害から守られるとしても、私はいくつものフィールドワークを予定していたからである。迷わず靴屋を探しまわってゴムの長靴を買い求め、その他の靴やズボンにも防水スプレーをしつこく散布した。十月六日、目下に広がる光景はプノンペン空港に近づくにつれはっきりと見えるようになった。道路があるらしい。電柱の頭が並んで見える。このあたりの家は高床式で建てられているが、貧しい家は多分建物も低いと想像される。ほとんど水没して、時々お金持ちの家らしい建物が、それでも軒先まで水につかっている。一体国土の何パーセントが水没してしまったのだろうか。人々はどうしているのだろうか。空港に降り立った私を早々に案内して下さった国際医療協力者の日本人ドクターは、メコン河とトンレサップ川の合流点に私を立たせた。水の色はいつもと同様に白く茶けた色であるが、はるか向う岸まで川巾いっぱいには河はドクドクと流れていた。足元を洗う水を指して「いつもと水位が五メートル位違う」というドクターの言葉に、思わず一步後ずつりをしてしまった。

幸いなことにはや雨は降らなかったので、数日前まで水びたしで動きのとれなかった田舎に向けて、ポランティ

「ア活動の車が盛んに動き出したので、私は有難く便乗した。カンボジアに来てから次々と目にする人々の苦勞を身近に知って、私は心から同情の氣持でいっぱいになった。連日新聞には被災の報道がなされ、大事な農耕牛を必死で非難させる様子、頭だけ残して水につかった金色の仏像、水沼の真中の高所(二坪位の場所)にとり残された二頭の牛に舟で飼料の草を運ぶ人の姿、その中でも、深い溝の一角に赤ちゃんの死体が白いお尻を上^へに浮いている報道写真には、「いや、地元の人は水害に慣れているから大丈夫ですよ」と言った日本人関係者の言葉が頭に浮かび、私の方が情緒的でありすぎると言われるのか、重い課題が心に残った。とにかく動き出したのであるが、先はサイゴンに至るという国道一号線を走りながら、車は道の凸凹にゆすられ私はまるで鍋の中のはねる豆になった気分だった。けれども不思議なことに舗装されていない土の道路は、いくらゆれてもソフトで、むしろなつかしい気分になされたのである。道路だけが高く、道沿いの家々では出入口付近に家族中が不自由そうに生活して、家の奥はまるで尻もちをついたようにどっぷりと水につかっている。本来ならこの時期には、収穫まで一か月余りという実りの穀倉風景が見られる筈なのに、全滅である。米ばかりか農作物が全滅、はじめ五十万人と聞いた罹災者は増加してその三倍にもなってしまったと報道された。

メコン河の氾濫はまさに大水害を引き起こしたのである。折しもカンボジアでは日本風に言えば、お盆の時期を迎えていた。私のフィールドワークは、村々をたずねて人々がどのように生きようとしているのか、若い人々はどういうな夢を抱いているのか、教師や父親・母親は子ども達をどのように育てたいと思っているのか―最終的にはそうした問いの答えを見つけることを目標にしてきた。しかし一九七五年から始まったポルポト政権下の大虐殺で大半の知識人・^{わざ}技のある専門家、芸術家や文化人を失って大混乱に陥った国が、それ以前から続く度々の内戦、周辺国との紛

争を経て今やっと歩き始めようとしてはいるものの、微力な私が人々の心にどこまで近づいて問いかけることができるのだろうか。一年以上かけて準備をしてきたが、とにかく自分自身が事実をしっかり見つめることがすべてに先行すると思ひ、人々をたずね歩くことにしたのである。インタビューを通して私が知り得た多くのことは、教育に関連したレポートとして別の機会にまとめたいと思うが、日本も含めてカンボジアに学校を建てようという運動に世界中からの応援が集まっている現在、このような活動と並行してカンボジアの人々の心に近づこうとする地味な研究努力が必要だと感じている。

私にとって全く思いがけない人物との出会いがあったこと、そしてそのことが現在のカンボジアを知るうえで大変深い意味を私に与えてくれたこと、を最後にお話したいと思う。旅に先がけて私の一番の課題は、言葉であった。専門の方々の力を借りてクメール語と日本語の質問カードを様々に準備し、子どもの生活や遊びについては沢山の絵カードを用意した。ところがプノンペン到着日に、たまたま里帰り中の30才前後の男性を紹介された。彼は日本に帰化したカンボジア青年で、いつもは主に日本国内で通訳の仕事をしているが、お盆のこの時期、ポルポト時代に殺された両親や兄弟に参り、またプノンペン在住の妹に会うために私よりひと足先にこの地に来たとのことで、早速通訳の役を依頼したのである。彼の出現がなかったら、私は片言の通訳と村々をたずね歩いていただろうと思ひ、望外の感激を味わったわけである。さて、予定のスケジュールが終った日の午後、私は個人的関心事のスパイス(香辛料)マーケットに案内してもらったことしたのである。マーケットは驚く程豊かな食材にあふれていたが、そこで商う人、またマーケットの周囲で動きまわる様々な職種の人々の背中には、やはりこの国の経済的な苦悩が感じられ、多くの人々が細い体で黙々と働いている中で、私自身の太った姿には罪の意識を感ずるものがあった。

一軒のどっしりした構えの香辛料・薬材屋に立ち寄った時のことである。何種類かの薬材などを買って求める為、彼は一生懸命に通訳をしてくれていたのだが、ふと気がつくとな彼は、ある木の実が入った麻袋の前に座り込み、私を呼んで「この木の実で、僕は子ども時代に遊んだんだ！そう、間違いない。これを並べて、こうやってぶつけて競争するんだ。」と、本当に思いがけない事を言い出した。すでに買い求めた40個の入った袋を全部床にぶちまけると、麻袋の中にも手をつっ込んで特に形のよいものだけを改めて40個選り直した。私は「その遊びの為にあと10個足して下さい」と頼むと、今度は自分のズボンでキュッと磨いて艶の出るのを選んでくれたが、その時彼は自分の少年時代にもどって木の実を選んでいたのであろう。つい先程まで有能な通訳として振まってくれた彼が、今は紅潮した顔で香料屋の散らかった床に坐り、きつと両親と一緒に暮らした頃の彼自身を夢のように思い出していたに違いない。目に涙をためて、木の実の感触から遠くなつかしい子ども時代を呼び起こした彼に、私は迷った揚句やっとな声をかけた。「あなたの分に、この実を買いましょうか」とたずねると、彼はきっぱりと「いいえ、ここで思い出すだけの方がいいんです」と答えた。幼い頃に友達と木の実を投げあった感触は甦っても、その名前はどうとう思い出せなかった(＊)。

知識層の両親であった為に親を失い、祖国を失い、難民少年として日本に渡り、日本の教育を受けて、日本人になった彼が、食材市場^{マーケット}の屋台で子どもものようにはしゃいで砂とうきびの莖をしゃぶり、私の顔をのぞき込むように「おいしい？」とたずねた姿を思い返し、今日のカンボジアと日本の間には、まだまだ沢山の人間の生き方に関わる事実があることをあらためて認識したのである。あの日から数日後、彼はもうひとりの日本人になったカンボジア青年を連れて私の前に現れた。二人とも私の想像を越える苦勞の後に、たくましく成人し、その様子が態度や話の内容

にあふれ出てくるのである。もうひとりの青年の方は、沢山の夢を語ってくれた。その中には、観光客の後を追う少年達（物乞い）へのメッセージや意欲の湧かない同世代のカンボジアの若者への飾らぬ言葉があった。また勉強に夢を抱いてもチャンスを得られないカンボジア少年たちの代弁者として語った言葉もある。

アジアの経済発展の渦の中に巻き込まれていくカンボジアを本気になって支えあるいは変えようとするエネルギーの一部が、このような日本人になったカンボジアの青年によって送り込まれているのだということを、私は旅の中で始めて知ったのである。

一九九六年秋、私は一年間の研修休暇の貴重なひとこまを、大洪水のカンボジアで過ごし、いくつもの課題を私の今後の研究ノートに記すことができたことを大変幸せなことに感謝している。

*（追ノート）

香辛料・薬剤問屋で、青年が思い出せなかった赤黒く艶やかで、巨大な基石のような木の実は、アンコーゲン（ANGKOUEN）という種子。同類のものは、発酵させて食品の色や風味付けに使われるという。

（本学法学部教授）